

OG訪問

今回訪れたのはJR手稲駅北口にある大規模病院、本学卒業生が多数活躍している手稲溪仁会病院です。卒業後3年目の言語聴覚士(ST)の山城さんに、札幌西エリアの基幹病院として急性期総合医療と専門医療を提供する同院での仕事の面白さを伺いました。

手稲溪仁会病院(札幌市) 言語聴覚士

山城 遥さん

(心理科学部言語聴覚療法学科* 2015年3月卒業)

* 2015年度よりリハビリテーション科学部言語聴覚療法学科



高2、言語聴覚士との出会い。

「看護師の母の影響で、気づいた時には看護師になろうと思っていました」という山城さん。高校2年生の時に言語聴覚士(ST)という職業を知りました。脳出血で入院中の祖父を見舞った際、担当STが「見学する?」と声をかけてくれたそうです。一緒に訓練室に入り、初めて知った言語聴覚士という医療職に、山城さんは大きな興味をもちました。すぐにSTについて調べて将来の目標に決め、「専門教育は地元北海道内の大学で」と本学に入学。卒業後の活躍の舞台には、できるだけ多くの経験を求め、急性期総合病院であり、救命救急センター、ドクターヘリ基地病院、地域災害拠点病院、地域医療支援病院など様々な指定を受けている手稲溪仁会病院を選びました。

毎日動く現場に対応。

お仕事について何うと急性期病院ならではのSTの姿が見えてきます。「朝は7時半には出勤、カルテを確認して8時40分に言葉や嚥下(飲み込み)のリハビリテーションを開始します。急性期ですから動けない患者さんも多く、訓練はベッドサイドが多いですね」と山城さん。現在小児を除き、あらゆる疾患の患者さんを担当しています。



同院の9人のSTのうち6人が本学卒業生。取材時は、ゼミの後輩の福原翠さん(2016年卒)から担当ケースの相談を受けていました。アドバイスをするより、まずは一緒に考えるという山城さんの姿勢が印象的でした。

加えて、多くの時間を割くのが嚥下の評価です。救急車で運ばれて来た患者さんが食事や薬を飲み込めるか、どんな形状なら飲み込めるかを評価することはSTの大切な役割。「全身、呼吸、意識状態、バイタル(血圧や脈拍など)の確認から始まり、のどの感覚はどうか、唾液は飲み込めるか、と進めていきます」。その日の予定に沿って実施するリハビリテーションと、いつやってくるかわからない救急患者。救急から要請がある度に、山城さんは前日組んだスケジュールを頭の中ですばやく組み替えて対応しているといいます。

終末期医療も。

同院は急性期病院なので、山城さんが関わる患者さんはほとんどが2週間から1カ月で回復期病院へ転院します。しかし、同院は地域がん診療連携拠点病院に指定されており、山城さんも研修を受けて「がん患者リハビリテーション料」算定可能なSTになったことで終末期の患者さんを担当することもあります。とくに印象的なケースとして挙げてくれたのは、60代、リンパ腫の患者さん。「生きる」意志が強く、ひどいむくみでほとんど動けなくなっても院内のカフェのコーヒーと食堂のカツ丼を諦めなかったそうです。そこで山城さんは理学療法士、作業療法士、看護師とチームを組んで万全を期して準備し、6人がかりで車いすに乗せ、ご家族と一緒に食堂へ大移動。

賑やかな中でカツ丼を堪能した患者さんは、その2週間後に天国へ旅立ち、ご家族がその日撮った映像は最後の団らの思い出になったそうです。「終末期は病状の変化が突然やってきます。短期間で患者さんの希望を叶えてあげられるよう、多職種がスピード感をもって連携し行動する大切さを教わったケースでした」。



就職して2年目の溪仁会グループでの発表に続き、3年目の今年度は札幌市病院学会リハビリテーション部門での発表を控えています。

経験を科学的に。

「平日は仕事一筋」と言う山城さんは、業務終了後の時間は国内外の論文の読み込み、調べ物、学会の発表準備に多くの時間を充てています。とくに注目しているのは、食べることとQOL(生活の質)の関係。飲み込みができず、床ずれができるほど寝ている時間が長かった患者さんが、訓練の結果口から食べられるようになると、床ずれが治り、さらに自分で車いすに乗れるほど回復したケースがあったそうです。「食べることの大切さは経験として誰もがわかっています。いつかそれを数値化して科学的に示したいです」。

スピード感あふれる臨床と、腰を据えた研究、どちらにも患者さんのQOL向上を願う山城さんの思いが詰まっています。



卒業式の1枚。中央が山城さん。いまは全員がSTとして各地で活躍中です。